

おわりに

ここに郷土・民俗資料として「土屋郷土史」を作成しました。

歴史を学ぶことは、ただ単にその年代を知ることだけでなく、有史2000年の長き年月の間に、私たちの先祖が築き上げてきた数々の有形無形の財産と、私たち郷土の豪族土屋三郎宗遠とその一族の栄光と挫折を「はだ」で感じとって、私たちの反省と明日への飛躍としたいと思います。

「温故知新」古いことが必ずしも良いということはありません。しかし、そこには長い間培ってきた何ものかが存在することがあります。そこから私たちの地域社会における自治活動・レクリエーション活動・各種団体活動・神社祭礼・寺社礼拝・慶弔・保安（防犯、交通安全等）・保健衛生・社会教育・生活改善施策・募金協力等共同体としての機能が十分生かされてくるような気がいたします。

しかし、物が豊富になってきた今日、私たちの里山には、家具や家庭電気製品等の粗大ゴミが不法投棄され、道路や河川には、ビニール袋・空き缶・空き瓶等が数多く投げ捨てられています。このような、心ない行為を「しない」「させない」ためにも、私たち住民ひとりひとりが「郷土愛」を持ち、郷土の里山保全の大切さを自覚しながら生活していく必要があると強く感じてなりません。

私たちの調査期間中にも、上惣領の葉山における土砂の埋め立て、地元の方々によって1400年もの間ずっと守ってこられた中庶子分の源水横穴古墳群の埋め立て等、日々刻々と私たちの周辺における変化の様は絶えません。

また、最近都市化された地域では、「まつり太鼓」の音が騒音と受け止められて、住民のあいだで問題になっているところもあります。当地域でも時代の流れとともに、次第にそのようなことも考えられますが、土屋地区唯一の伝統芸能である「まつり太鼓」は、私たちの先祖から引き継がれた大切な財産であり、子どもたちを通して次世代へと順次伝えていきたいもののひとつです。

調査中に古老のお話のなかでは、「水呑地藏さまを知らない寺世話人がいる」とか、「源水の横穴古墳群や土屋一族の墓の場所を知らない者がいる」と言って嘆いておられました。

この土屋には、路傍に安置され素朴さを感じさせる地藏尊や道祖神などの石仏群、各地で保管し伝承されている仏像や掛け軸等の神仏具、古代から中世にかけて所々にみられる遺跡、昔から土屋の人達が大切にされてきた里山（雑木林・竹林・斜面林・田・畑・小川・用水路等広い意味での里山）、各寺社に関連する諸遺産等があります。私たちは、先祖から引き継いだこれらの遺産を「知らない」「分からない」でそのまま放置して無残な姿にしてしまうのではなく、有形無形の大切な遺産を次世代へ誤りなく引き継いでいく責務があると思います。

現に、寺分正藏院所蔵の「土屋三郎宗遠公木像」は、当時の研究者によってその姿が消されたままになったり、源水横穴古墳群が埋め立てられたり、貴重な遺跡・文化財等が調査・保護もされず乱開発されたり、自然・生態系を乱す行為がされたりしています。

また、土屋は昔から農業地域でしたが、諸般の事情によって農業後継者は年々減少傾向にあります。そのため、田畑の荒廃が目立ち、里山の雑木林も篠竹が生い茂り、その姿は

変貌しつつあります。このままの状態が続けば土屋は荒れ野原となってしまうかも知れません。かといって開発一辺倒で行けば、平塚市の唯一豊かな変化に富んだ自然が残っている土屋は一変してしまい、土地そのものも、そこに住む私たちの心も砂漠化してしまうと言っても過言ではないと思います。

この農業問題、いわゆる農地・山林の有効利用問題は極めて重要な課題のひとつとして、行政・農業協同組合・農業経営者相互が真剣に、その問題解決の糸口を捜し出して、新たな施策を講じていくべきだと思います。

地域住民が相互融和をはかりつつ、土屋の私たちが知恵と勇気を結集して、調和のとれた「土屋におけるマスタープランづくり」をすることによって、将来を見据えた奥の深い土屋が見えてくるような気がします。

したがって、私たちは普段から問題意識を持って、適切な対応ができる力を養っておく必要があると思います。

どうか「土屋郷土史」を愛読され、「土屋」をより多く知っていただき理解を深められ、また、地域探索等をされて「土屋」を「はだ」で感じとっていただけたら幸いです。

この「土屋郷土史」の作成にあたっては、平成8年11月8日に12名のメンバーで「ささりんどうクラブ」を結成して、その後、地域の先輩方にはお忙しい中でおはなし等をお聞きしたり、現地調査をしながらこの度の発刊へとこぎつけました。ここに紙面をお借りしまして、ご協力頂きました地域のみなさまに厚くお礼申し上げます。

なお、本刊作成においては、期日の限られたうえで、構成メンバーは全て歴史学・民俗学に精通した者ではなく、「土屋を根っから愛する者」ばかりであって、そのなかで地域の方々のお知恵をお借りしながらのことでありました。したがって、愛読された方々にとっては、所々の記述に対する「お叱り」や「ご意見」がおりと思いますが、どうぞ今後のより良い「土屋郷土史」作りのために、ご忌憚のないご指導とご指摘をお願いしたいと思います。

最後に、このささやかな冊子が、これからの土屋の指針役にもなり、なおかつ「土屋を故郷とする方々」にとり、また「土屋を愛する方々」にとって、土屋の歴史を旅するときの案内役にもなれば幸いです。

平成11年11月

「ささりんどうクラブ」名簿 (順不同)

蓑島 武夫 (小 熊)	関野 積夫 (中庶子分)	安池 淳三 (寺 分)
小清水四郎 (下庶子分)	久永 繁 (下庶子分)	杉山 昇 (寺 分)
山本 藤枝 (上庶子分)	岩本 哲男 (惣領分)	中村 政治 (惣領分)
石黒 淳子 (上惣領)	小清水恒夫 (中庶子分)	関野 勝久 (中庶子分)